

## 第一、はじめに

- 1、私は1948（昭和23）年11月3日滋賀県で生まれ、現在は大阪経済大学学長補佐、経営学部准教授の職にあり、情報処理概論・ITガバナンスなどを担当する一方で、北朝鮮に関わる人権問題の調査、研究、フィールドワーク、脱北者の救援活動等をして来ました。
- 2、高等学校入学後、私は次第に社会問題に関心を強めていき、朝鮮半島の状況にも関心をもちました。その後、大学時代には朝鮮半島の問題から関心が離れていましたが、1983年に北朝鮮政府が実行したアウンサウン廟の爆破や1987年の大韓航空機爆破という異常な事件から、再び朝鮮半島、とりわけ北朝鮮の政治と社会に関心を強め、関連する本を読み、北朝鮮の特異な独裁体制の実態を知ることができました。  
大阪経済大学経営学部の教員となっていた1994年ごろから、同じように北朝鮮の現状ならびに在日コリアンの生活に関心を持っていた同僚らと共に、1959年に始まった北朝鮮帰国事業の実態と北朝鮮帰国者の実情を調査し、その日本の家族から話を聞くなどの作業を始めました。
- 3、1990年代の後半になると、北朝鮮の社会状況は危機的となり、特に食糧事情の悪化などから中国に脱出して行く人たちが、いわゆる脱北者が急増し、その中には帰国事業で日本から北朝鮮に渡った人たちとその家族も含まれていました。その人たちから救援の要請が届くようになり、日本に戻るようになってほしいと支援を求められるようになりました。私たちの他にも脱北者の救援に関わっている団体や個人があり、これまでに日本に入国した脱北者は百数十人に上ると思います。
- 4、脱北者の救出に関わるようになったことで、私たちは多くの脱北者に接し、北朝鮮の社会や生活の実情を直接体験者から聞くことができました。特に、帰国事業で北朝鮮に渡った人たちからは、帰国事業で在日本朝鮮人総連合会（以下、「朝鮮総連」と略します）がおこなった北朝鮮の生活に関するバラ色の宣伝と熱心な勧誘、帰国までの朝鮮総連の組織的な支援など、そして、北朝鮮に着いた時の様子とその後の思いもよらない一時代戻ったような生活とその後の苦労や迫害について聞くことができました。  
その話の中でとりわけ、北朝鮮に渡って清津の港に着いた時、赤茶けて殺伐としたその風景、貧弱な港の設備、そして出迎えに来ている北朝鮮の人々の貧しそうな身なりを見て、帰国者たちはすぐに「騙された」と感じたことと共通して語ることに、私たちは帰国運動の中にあつた犯罪性を強く教えられる思いでした。
- 5、北朝鮮政府と朝鮮総連がおこなった帰国運動については、運動の中にあつた虚偽と欺瞞や朝鮮総連幹部による事実の隠ぺい、その結果多くの帰国者と日本の家族に与えた甚大な被害など、申し上げたいことは沢山ありますが、この陳述書では、赤十字国際委員会が保有する関係文書や近年公表されたソ連・東欧の外交官の文書に対する最近の研究成果にもとづいて、北朝鮮政府が帰国事業を行った目的、日本で帰国運動が盛り上がったのは北朝鮮政府の方針とそれにしがたつた朝鮮総連の取組みによるところ、それを可能にした指揮系統として朝鮮労働党の組織「学習組」が朝鮮総連内に作られていたこと、朝鮮総連幹部は密航などによって北朝鮮へ度々代表を送っており、北朝鮮の正確な実情を知っていたと判断できること、帰国申請や帰国者の乗船順序などの実務面でも朝鮮総連が強い影響力を持っていたことを明らかにし、北朝鮮政府とその指揮下の朝鮮総連が帰国運動を展開して9万3000余人を北朝鮮に行かせた真の目的を説明し、虚偽宣伝で欺いた帰国運動が帰国者のその後の人生を大きく狂わせ、甚大な被害を与えた壮大な誘拐であったことを説明します。

## 第二、帰国運動を進めた朝鮮総連の設立とその性格

- 1、日本敗戦の3日後、在日朝鮮人の中では身の安全と生活の確保、そして朝鮮半島への帰還を考え手、東京で「在日朝鮮人対策委員会」が組織され、8月20日には「在日本朝鮮人居留民連盟」や「在日朝鮮同胞帰国指導委員会」が組織されました。また、地方でも同じような朝鮮人団体が続々と設立され、8月末にはその数は約300団体にも達しましたといえます。そして、1945年9月10日には、これらの組織を基礎に、東京の代々木で44人の代表が集まり、朝連結成準備委員会が開かれました。  
続いて、10月15日、東京の日比谷公会堂に全国から400人の代表が参加して、在日本朝鮮人連盟（以下、「朝連」と略します）結成大会が開催されました。活動方針や人事の決定は翌日の会議に持ち越されましたが、16日の会議が開かれる前に親日派は、暴力も伴う批判を受け、「身の危険を感じ退散したため、左派、民族派主導の結成大会になってしまいました。（金賛汀『朝鮮総連』新潮社、2004年、p24-.25。）
- 2、朝連の結成時、朝連組織から追い出された親日派、右派は新組織の結成に乗り出し、秋田刑務所で無期懲役刑に服していた朴烈が釈放されると、彼を団長にして、1946年10月、在日本朝鮮人居留民団（以下民団、1948年の大韓民国樹立後に朝鮮を大韓民国に改称）を結成し、在日の右派勢力の結集に努めました。「結成当時、民団には地方の組織もなく、脆弱な団体で親日派に対する批判が強い在日同胞の支持は圧倒的に朝連にあつた」といいます。（金賛汀 前掲書、p.39.）
- 3、1949年に入り冷戦が一段と激化するなかで日本政府は「団体等規制令」を制定し、1949年9月に朝連に解散を命じました。  
朝連の解散命令以降、日本政府は在日社会に対する抑圧姿勢を強め、民族学校に朝鮮語による授業を禁止することなどの通達を出し、従わない民族学校は閉鎖すると警告しました。そして、その警告の1週間後には、92校の民族学校に閉鎖命令を出し、245校には改善命令を出しました。また外国人登録令を改定し、在日朝鮮人に対する統制を強めました。  
このような動きに対抗して、左翼系の在日朝鮮人は朝連に代わる新たな組織となる在日朝鮮統一民主戦線（以下、「民戦」と略します）の結成に動き出し、1951年1月、民戦を結成するにいたりました。（金賛汀 前掲書、p.41-42.）
- 4、結成の当初、民戦の指導部は日本共産党民族対策部の朝鮮人党員が占めていましたが、韓徳銖など北朝鮮との関係を重視する民族派が、金日成の書簡や南日外相の声明と連携して路線転換を迫り、1955年5月24日、民戦6回大会で民戦の解散と朝鮮総連の設立を決定し、翌25日、浅草公会堂で朝鮮総連の結成大会が開かれたのです。  
「総連の結成を受けて日本共産党も7月に朝鮮人党員を束ねていた『民族対策部』を解散し、8月には約3000人といわれた朝鮮人日本共産党員の全員が離党し、そのほとんどが朝鮮総連で活動するようになった。  
こうして……日本共産党と朝鮮総連は、思想的共通性は残しつつも一切の組織的關係を絶つとともに、「朝鮮総連は日本の革命運動には参与せず、日本の内政問題に関与しないという立場を鮮明にし」たのです。  
韓徳銖は民戦の活動には根本的な誤謬があつたと総括し、「共和国政府の政策を支持し貫徹する」立場に立たなかつたことを批判しました。「韓徳銖のこの結論に則り、以後の朝鮮総連は北朝鮮に絶対的忠誠を誓う団体として活動を開始することになりました。（金賛汀 前掲書、p.48-52.）」  
朝鮮総連のホームページには、「金日成主席は、当時を回想してつぎのようにのべている。」として、「わが党は、朝鮮人はなによりもまず朝鮮革命を行うべきであり、在日同胞は民主主義的民族権利を守り、祖国の統一独立を実現するためにたたかうべきだという在日朝鮮人運動の路線転換方針を示しました。」と掲載しています。

### 第三、朝鮮総連の中の北朝鮮労働党組織「学習組」

- 1、1957年3月、朝鮮総連は全国共産主義者代表者懇談会を開催し、朝鮮労働党の政策を学習する組織として朝鮮総連内に「学習組」を設立することを決定しました。ついで、1958年5月の朝鮮総連第4回大会で、活動家が3名以上いる機関には「学習組」を組織することを決定しました。この決定にもとづいて、全国に360の学習組が作られ、その構成員は3000名ほどであったといわれています。もちろん「学習組」の実態は、朝鮮労働党の政策を学習する単なる勉強会ではなく、「朝鮮労働党の日本分局」であり、朝鮮総連の中核組織として朝鮮労働党の方針にしたがって活動し、「総連系の在日朝鮮人を北朝鮮に従属させる最も重要な役割を担ってきた秘密組織」でした。（金賛汀『朝鮮総連』新潮社、2004年、p.60-61、63。）  
「学習組」によって、組織的にも朝鮮総連は北朝鮮労働党すなわち北朝鮮政府、したがって金日成と金正日に支配され、指導されて活動する仕組みが確立されているのです。

### 第四、在日朝鮮人の中に影響力を広げた朝鮮総連

- 1、朝鮮総連が結成された当時の在日朝鮮人は、厳しい経済的困窮と社会的差別の中で苦勞していた。結成されたばかりの朝鮮総連は、困窮する同胞の救済に力を注ぎました。特に末端の活動家は日々に接する同胞の貧窮した生活を救済する活動に努めました。在日朝鮮人が職業に就く機会が極めて少なかったのです。
- 2、1956年10月に在日朝鮮人商工連合会が行った在日朝鮮人の職業調査によると、最も多い職業の第一位は「屑鉄・古物集荷」、つまり屑屋です。続いて飲食店、パチンコ屋となります。飲食店というのはホルモン焼きなどを提供する小さなお店など、貧弱な経営でした。それでも、そのような自営業でさえ営めるのは恵まれた人たちで、有職者は40%に過ぎず、多くが失業、半失業状態でした。（朴在一『在日朝鮮人に関する総合調査研究』（新紀元社、1957年）に基づく金賛汀さんの記述による。金賛汀 前掲書、p.56-57。）  
学校を卒業しても就職は難しく、1954年の中卒者の未就職率は、日本人の場合は14%でしたが、在日朝鮮人の場合はほとんど職が見つからなかったのです。失業者の世帯は生活保護に頼ることになります。1956年3月現在、在日朝鮮人の被保護世帯は在日総世帯数の24%に達していました。そんな中、その年の9月に厚生省は密かに「朝鮮征伐」と称して、保護世帯の51%に生活保護の打ち切り処分を行いました。
- 3、在日朝鮮人の厳しい生活状況の下で、朝鮮総連の末端の活動家は、困窮した同胞の家庭を訪ね、相談相手となることを通して、多くの同胞の信頼を得ていきました。（金賛汀 前掲書、p.55-57。）
- 4、1955年8月、結成直後の朝鮮総連の代表団が北朝鮮に渡ったとき、会見した金日成は「民族教育が占める重要性を認識しており、在日朝鮮人のために教育費と奨学金の送金を約束」としてと表明しました。そして1957年4月に1億2109万円が朝鮮総連に送られてきたのを皮切りに、その後継続して教育援助金が送られてきたのです。  
「それまで『祖国』が具体的に在日のために何かをしてくれた体験を持たない人々にとって、素晴らしい感激的な出来事であった。そこに人々は『祖国』の『愛』を実感し、未来に対する希望を膨らませました。（金賛汀 前掲書、p.69-71。）
- 5、この教育援助金に支えられて、総連の民族教育が在日同胞の信頼を得たことは、その学校の生徒数の著しい増加に示されています。1951年には1万4925人にまで減少していた朝鮮学校の生徒数は、1960年には3万5250人にまで増加したのです。（金賛汀 前掲書、p.72。）
- 6、こうして「在日社会に北朝鮮に対する期待感が急速に高まり、「朝鮮総連に対する在日の期待が高まる中で、一方の民団への信頼は低下していった。いや人々は失望したとさえいえる」状況が生まれました。（金賛汀 前掲書、p.71。）
- 7、しかし、在日朝鮮人を感激させ、「祖国」の「愛」を実感させた教育援助金にも、北朝鮮政府による深い「洞察」があった

のです。朝鮮「総連が帰国についての噂話をあれほど急速に、そして効果的に、広めることになったその原動力として決定的だったのが、民族学校のネットワークで」した。（テッサ・モーリス・スズキ『北朝鮮へのエクソダス 「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社、2007年、p.209。）

「55年10月のソ連文書には、北朝鮮の南日外相の意味深い発言も記録されていた。

『（対韓国政策・統一問題で）日本に住んでいる朝鮮人を利用できそうである。（略）このような目的で、朝鮮政府は在日朝鮮人に対する物質的援助が不可欠だと考えている』

北朝鮮政府は自らの政策遂行に在日コリアンを利用しようと考え、在日の北朝鮮支持層を拡大するための物質的援助を検討していたのである。実際、北朝鮮政府は57年から毎年、朝鮮総連に高額の「教育援助金」を送り、在日社会での好感度を高めていった。（菊池嘉晃「旧ソ連文書から読み解く、「北朝鮮帰還事業の爪痕 北」のシナリオと工作 金日成は帰国運動をどう利用したか」『中央公論』2006年11月、p.161。）

「総連の民族学校組織網の急速な発展こそ、南日をはじめとする人たちによって1955年末以来展開されてきた在日朝鮮人政策のもっとも顕著で重要な成果だった。この政策の重点目標は、北朝鮮の在日朝鮮人社会との結びつきとコントロールの強化にあった（それに、南日が以前に口にした、韓国との接触のための架け橋づくりも、たぶんあっただろう）。この目標達成のためなら、北朝鮮政府は総連の教育システムに相当額を投資することも厭わなかった。

この投資が当初から祖国への大量帰国促進のひとつの方法として意図されていたものか、はっきりした証拠はない。しかし1958年以降はそのために大いに役立った」のでした。（テッサ・モーリス・スズキ 前掲書、p.210。）

### 第五、北朝鮮政府が計画的に進めた帰国運動

- 1、これまで北朝鮮への帰国運動は、以下のように日本国内の在日朝鮮人による自発的な帰国希望の高まりとして急速に盛り上がりつつあったと言われてきました。  
1958年8月11日、朝鮮総連神奈川県川崎支部中留分会の集まりで北朝鮮に集団帰国したいという希望が表明され、金日成に手紙を送り、その二日後の13日に開かれた「8・15解放13周年記念中央大会」でも北朝鮮への帰国の希望が表明され、大会の名で金日成に手紙を送りました。この動きを受けて北朝鮮側は、9月8日に開かれた共和国創建10周年記念慶祝大会で、金日成が「わが人民は、日本で生きる途を失い、祖国の懐に帰ってこようという彼らの念願を熱烈に歓迎します。」と述べ、「共和国政府は、在日同胞が祖国に帰り、新しい生活ができるよう全ての条件を保障するでありましょう。我々はこれを、自らの民族的義務と考えます。」と表明したことから、日本全国をおおむね大きな運動になっていったといえます。
- 2、ところが、ソ連文書が利用できるようになった近年の研究は、これまでも一部で言われていたように、帰国運動の盛り上がりは、実は北朝鮮政府が計画し、その指示を受けた朝鮮総連が実行したものであることを明らかにしました。  
中留分会が帰国希望の手紙を送るよりも一月近く前である1958年7月14日、中国国境に近い別荘で休暇を過ごしていた金日成は、ソ連代理大使V・I・ペリシェンコを呼び、在日朝鮮人の問題について議論しました。「金日成はこのとき初めて、在日朝鮮人の問題をめぐる北朝鮮の新しい野心的な方針を、ソ連に公式に明らかにした」のです。「このときの議論は少なくともこれまで手に入れたなによりも、」金日成の「帰国に関するもっとも深い心の内」をよく示しているものでした。「金日成はペリシェンコに、……今、朝鮮民主主義人民共和国は新しい方針にのりだす 『われわれは、政府および人民が日本に暮らすすべての同胞に生れ故郷に帰るように勧めると、発表することになる』。……『2・3年前のわが国の経済的立場では、日本在住の朝鮮人のたとえば十萬家族が共和国に帰ったら家と職を支給する、といった案をもちだすことはできなかった。現在は、一定期間内にそうした家族に職と十萬戸のアパートメントを提供する能力がある。

平壤および地方での住宅や工業建設では労働力が不足しており、そうした分野での仕事や工業生産、とくに炭鉱での仕事、そして農業分野での仕事を提供できる』と語ったのです。

しかもその上、「金日成も明言しているように、帰国についての北朝鮮の新方針は経済的動機から発しただけではなかった。大量帰国が実現すれば、朝鮮民主主義人民共和国に『経済的のみならず、政治的にも大いなる利益がもたらされる』だろう、と金日成は強調した」のです。（テッサ・モーリス-スズキ『北朝鮮へのエクソダス 「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社、2007年、p.229-230）

3、金日成がこの時ペリシェンコに語った内容には、帰国運動の具体的な内容も含まれていました。金日成は次のように述べています。

「我々は、日本在住のすべての同胞が自らの祖国に帰ってくるよう勤めており、この問題について日本政府と合意に達したいと希望し、次の2点について我々は近く声明を出す。共和国に帰ってきた、すべての朝鮮人たちは、住居と仕事、すべての政治的または経済的な権利を得、彼らの子供たちは共和国の学校、大学で教育を受けるということを強調するつもりである。」

この表明によれば、この時金日成は、在日朝鮮人60万人すべての帰国を方針にして、住居と仕事と子供たちの教育の保障を宣伝していくことを決めていたのです。

さらに8月12日、金日成はペリシェンコに、すでに日本で帰国運動の準備を進めていて、次のような仕方と順序で取り組んでいくと打ち明けました。

「朝鮮労働党中央委員会連絡部は、独自のチャンネルで、すでにある期間にわたって在日朝鮮人の中で必要な作業を行っている。日本からの朝鮮人の帰還に関する問題提起において、イニシアティブを発揮するのは日本に住む朝鮮人自身となる。そして、朝鮮総連が日本政府と共和国政府にしかるべき要望をするのである。その後、共和国政府による声明が続くことになる。」（菊池嘉晃「北朝鮮帰還事業「前史」の再検討 - 在日コリアンの帰国運動と北朝鮮の戦略を中心に - 」『現代韓国朝鮮研究』第8号、2008年11月、p.79、およびそこに引用掲載されているソ連文書。）

帰国運動を研究してきたジャーナリスト菊池嘉晃さんがいうように、「この発言こそ、58年8月の中留決議から突如高揚した帰国運動の謎についての「タネ明かし」で……中留決議から翌月の北朝鮮側の歓迎声明に到る一連の流れは、北朝鮮当局が描いたシナリオによるものだった」のです。（菊池嘉晃「ソ連秘密文書であぶり出された「帰国運動」の背後に北朝鮮の「工作」」、『読売ウイークリー』2006年7月16日、p.74。）

## 第六、ソ連・中国からも進めた北朝鮮への帰国

1、北朝鮮政府と朝鮮総連が日本で帰国運動を盛んに展開していた当時、北朝鮮政府はソ連からも中国からも集団帰国を進めていました。

2、ソ連のサハリンには、第二次大戦前に仕事を求めて、あるいは戦時動員で連れてこられたまま、戦後も「無国籍」状態で残留した朝鮮人の人たちがいました。また戦後になってから、一定の期間北朝鮮から派遣されて、そのまま残留した労働者たちもいました。

1957年3月、ソ連駐在の北朝鮮大使は、「彼ら（サハリンの無国籍朝鮮人）の一部を共和国に帰国させ」たいとソ連側に提案しました。ソ連文書によると、当時サハリンの無国籍朝鮮人は約1万5000人にのぼっています。

サハリン在住で当時の状況に詳しい朴亨柱氏の著書『サハリンからのレポート』によると、58年ごろから、ナホトカ駐在の北朝鮮総領事館の人物が、無国籍の朝鮮人たちに北朝鮮国籍をとらせ、北朝鮮の経済建設に参加させることなどを目的に、「サハリン朝鮮民族学校の中学卒業者は祖国の大学に優先的に入学できる」などと宣伝しました。在日朝鮮人に対する帰国の勧誘と似たようなことが、サハリンでも行われていたわけです。そうして、戦後の契約労働者の残留組を北朝鮮に集団帰国させる計画が、積極的に進められていきました。ソ連文書によると、

1957年10月ごろ、労働者とその家族の帰国が始まり、58年6月にはソ連政府が、極東のソ連企業で働く朝鮮人契約労働者を北朝鮮に帰国させることを決定し、59年には、1万人弱が北朝鮮に帰国したというのです。（甲30号証、菊池嘉晃「ソ連秘密文書が裏付ける「北」コメも足りない「楽園」の虚妄」、『読売ウイークリー』2006年8月13日、p.22-23）

3、北朝鮮政府は中国からも朝鮮人を帰国させようとしていました。ソ連文書によると、58年に訪中した金日成率いる北朝鮮代表団は、「朝鮮における労働力の不足を考慮して」北朝鮮への出国を希望する中国国籍の朝鮮人を送還するよう要請しました。これを受けて、中国政府は59年初めごろ、主に中国東北部在住の該当者4万人を北朝鮮に「引き渡す決定」を行いました。中国からの帰国者第一陣の到着は、59年3月末に予定されていました。

ソ連からも中国からも朝鮮人を北朝鮮に帰国させた金日成の目的は、「やはり労働力の補充だった」のです。（甲30号証、菊池嘉晃「ソ連秘密文書が裏付ける「北」コメも足りない「楽園」の虚妄」、『読売ウイークリー』2006年8月13日、p.22-23。甲6号証の2、菊池嘉晃「旧ソ連文書から読み解く、「北朝鮮帰還事業」の爪痕（後編） 旧ソ連・東欧文書で明かされる真相「帰国運動」の「変質」と帰国者」、『中央公論』2006年12月、p.255。）

4、ソ連・中国からも帰国を進めた背景として、赤十字国際委員会文書などを詳しく調査したテッサ・モーリス-スズキさんは、金日成が帰国運動を展開する決定をした「動機はひとつではなく、1958年前半に同時におこったいくつかの重要な政治的变化の集合だった」としたうえで、その重要な変化のひとつが朝鮮戦争で北朝鮮に入っていた中国志願兵の撤収だったことを指摘しています。

朝鮮戦争が終わった後、ソ連系朝鮮人技術者は1950年代後半にはソ連に帰国して行きました。その後も中国「志願兵」の多くは北朝鮮にとどまり、1957年末になってもおよそ30万人が残って、戦後の再建に協力し、建設作業にも参加していました。

しかし、中国政府が1958年5月に決定した経済計画、いわゆる「大躍進計画」と呼ばれる「おそろしく労働集約的な事業に、中国は動員できる労働力をすべて投入しなければならなくなった」ため、中国政府は北朝鮮に残って復興を支援していた志願兵の引きあげを決めたのです。中国人民志願軍の撤退は1958年10月に完了しました。

1958年には数か月にわたって北朝鮮の各地で中国志願兵の歡送会が開かれました。金日成は中国志願兵の撤収によって失われる労働力の一部だけでも補おうと、中国東北部の朝鮮人の帰国を中国政府に要請しました。ソ連大使であったプザノフの日記には、「1958年末ごろ金日成が中国の説得に成功して、4万人ほどの朝鮮人の帰国を約束させた」と記されています。

このような事実を踏まえ、テッサ・モーリス-スズキさんも「日本からの朝鮮人の大量帰国の理由のひとつは、同じような労働力の穴埋めを意図したもののようだった」と評価しています。（テッサ・モーリス-スズキ 前掲書、p.226-227）

## 第七、帰国事業の実務を取り仕切った朝鮮総連

1、北朝鮮政府の指示にもとづき、朝鮮総連は在日朝鮮人の中から自発的に盛り上がっていったかのように帰国運動を展開していきました。そして、帰国事業の中で、実際に帰国希望者を募り、説得し、帰国を決断させ、準備させ、財産を処分させ、新潟へ移動させるまでの過程を取り仕切ったのは、朝鮮総連でした。

2、朝鮮総連が発行していた1959年5月1日付けの新聞『朝鮮総聯』（甲3号証の1）には、帰国の実務問題の推進を決定したとして、「その主な内容は、財産、負債の整理、帰国集団において自発的に決定された乗船順位に従って身の回りを整理して、いつでも乗船港に出発できるようにする。財産整理や輸送の便宜を図るために、各地に帰国同胞財産整理委員会、輸送隊を造ることなどを骨子にするもの」だと報じています。

3、同5月11日付け『朝鮮総聯』（甲2号証の6）によると、7日

に全国帰国対策委員長会議が開かれ、「総聯に申請された名簿に基づいて実務をすすめる」ことを重ねて要求するとともに、「帰国集団を強化し、帰国者の乗船順序の決定、財産、負債の整理を早めること、1959年度の帰国者の輸送計画を樹立しそれにしたがって、第一船に乗船する人々の隊列を整えることを決定」しています。つまり、朝鮮総連側が帰国者を組織し、誰をいつ帰らせるかまで決定していくという姿勢です。そして12月以降の実際の帰国過程においても、朝鮮総連が帰国者集団を組織の指揮下に置いていたため、帰国申請と乗船の手配についても、采配を振るう実権を事実上握っていたのです。

4、1959年9月21日に始まった帰国申請の受付は、「帰国内」の内容に反発した朝鮮総連がボイコットしたため「開店休業」の状態になりましたが、妥協が成立したため、11月4日から再開されました。大勢の人が申請に押し掛け、受付窓口が混乱するのではないかと見られていましたが、「朝鮮総連の割り当て統制が行き届いていたこと」から順調に進んだ。「朝鮮総連本部は四日夕刻までには全国で五千人が登録するだろうとっている。(中略)名古屋では総連本部が被災者を優先的に届け出させる方針という」(甲18号証の4、『朝日新聞』1959年11月4日)。朝鮮総連による帰国申請の統制は行き届いており、帰国申請者が全国にまたがっているのは、朝鮮総連が「一時にどっと登録しては窓口が混乱、帰還船の出航が遅れるという理由で、総連各地方本部に帰還船の収容力(各船約千人)に合わせた都道府県の登録数割り当てを行い、統制のとれた申請を行うよう指示したため」と報道されています。「韓徳銖総連議長は『第六次船以降は登録者を地方ごとにまとめ、関東、東北、北海道、東海、北陸、近畿、中国、九州、四国の順に乗船できるよう手配する。』」と方針を述べています(甲18号証の5、『朝日新聞』1959年11月5日)。同日付の『毎日新聞』(甲3号証の7)も4日の申請受付が整然と行われたことについて、「その裏には朝鮮総連が作った綿密な『帰還計画』による指導があった。」と報じています。「帰国者集団は30-50世帯前後の帰国希望者で結成され、現在全国に約八百集団出来ている。総連は“1分会-1帰国集団-1成人学校”をスローガンにし、帰還者の教養を高めるため各地で朝鮮語や北朝鮮の地理、歴史などの講座を開いており、1-5船には全国に渡り、特に生活に困っているものなどを帰還希望者同士の話し合いで優先させるという。総連では『帰還業務が円滑にすすむように積極的に日赤に協力しているのがわれわれの立場だ。帰還者に対する統制と誤解しないで欲しい」と弁明しなければならないほど統制力をもっていたのです。

5、これについて日赤、厚生省では『総連というよりも帰還者代表もしくは世話人ということで連絡を色々受けている。帰還者の乗船順位などは申請者の希望を尊重して決める。』と述べています(甲3号証の7、『毎日新聞』1959年11月5日)。ここに朝鮮総連が帰国者集団を組織して申請から乗船予定まで計画し、講座を開いて準備させるなど、帰国者とその帰国の事業を「統制」していることが示されています。日赤・厚生省側も朝鮮総連との協議を進めていることを認めており、「乗船順位などは申請者の希望を尊重して決める」ということは、その背後にいる朝鮮総連の「希望を尊重して決め」ているということです。11月5日付けの先の『朝日新聞』(甲18号証の5)にも「帰還船割り振りをどうするかの問題につき、高木日赤社会部長と李白南朝鮮総連中央帰国対策委渉外課長(総連外務部副部長)らが四日細かい点を協議した」ことを報じています。

6、帰国者集団を組織して「統制」下に置き、日赤には協議して業務をすすめることを認めさせた朝鮮総連は、帰国希望者を募るために、徹底した誇大宣伝を行いました。

在日朝鮮人の大半は朝鮮半島の南の出身であったので、北朝鮮へ渡ることは見知らぬ地域への移住であり、また再び戻ることが許されていない移住であり、その人の人生に大きな影響を与えることでした。それだけに、組織的に帰国を勧誘し、説得し、決断させていく前に、朝鮮総連幹部は北朝鮮の生活の実情を確かめ、事実を在日朝鮮人に、とりわけ帰国者予定者に事前に伝えて、その上で意思決定を求める責任があったのです。

7、ところが朝鮮総連はそれをしようとしなければかりか、誇大な虚偽のプロパガンダを継続していきました。「1958年半ばから、大規模でよく組織されたキャンペーンを展開して、日本を

出て北朝鮮に渡ろうと同胞を誘った」のです。

8、その上、「帰国事業が始まるとしだいにその日常的な業務を仕切らなくなった。帰国者名簿を作成する。目標数を設定する。目標数に達するように特定の朝鮮人に帰国するよう圧力をかける。その一方で、総連の、あるいは北朝鮮政府の、政治的  
要求に合わない「帰国希望者」の申請を退ける」ことまで行っていたのです。(テッサ・モーリス・スズキ 前掲書、p.199。)

9、テッサ・モーリス・スズキさんによれば、北朝鮮への帰国の「申請手続きに総連が中心的役割を演じていることは多くのICRC(赤十字国際委員会 山田)報告で強調されている」というのです。(テッサ・モーリス・スズキ 前掲書、注のp.28。)

10、テッサ・モーリス・スズキさんはさらに驚くべき事実を明らかにしています。赤十字国際委員会の新任の団長オットー・レーナーはじめ代表団が1959年10月24日、日本赤十字社の井上益太郎と会談した際、「井上は、日本の警察が密かに総連に潜入して極秘情報を集めており、自らもきわめて詳細な報告をうけている、と明らかにした。そして、その機密情報の概要を国際委員会代表たちに説明して、さらに、警察官僚に紹介しよう」といいました。そして、その二日後、レーナーはじめ代表たちは日赤本社で警察幹部と会ったとき、警察から次のような説明があったというのです。「現行の帰国事業は、日本では北朝鮮政府に代わって総連によって処理されている。北朝鮮政府によって決められ、総連によって適用されている方針に反する行動をとる者がいれば、その者はすべてを危うくすることになり、したがって、北朝鮮では当局から、日本では総連から、よい処遇はうけない」ことになる、というのです。このことは1959年10月31日付けBorsingerから国際赤十字委員会宛の文書の中に記されています。(テッサ・モーリス・スズキ 前掲書、p.280。)

この当時、すでに北朝鮮政府と朝鮮総連の方針に従わなければ「すべてを危うくする」支配が実行されていたのです。

## 第八、朝鮮総連による誇大・虚偽宣伝

1、帰国者集団を組織して「統制」下に置き、日赤には協議して業務をすすめることを認めさせた朝鮮総連は、帰国希望者を募るために、徹底した誇大・虚偽宣伝を行いました。

2、当時、北朝鮮政府と朝鮮総連は各地で人々を集め、映画や幻灯、写真などを用いて、北朝鮮を「地上の楽園」と説明し、帰国を決断させようとしてきました。残念ながら、朝鮮総連が説明につかった映画や幻灯、写真や文書などを入手できていませんが、朝鮮総連が発行したいくつかの文書は手に入れることができました。

その中の一つ、朝鮮総連中央常任委員会宣伝部が1958年12月に発行した『在日同胞の帰国実現のために 帰国問題に関する資料および問答集』(以下「問答集」、甲31号証の1及び2)の内容を紹介します。この問答集は、「帰国問題と関連して同胞の中から出てきたさまざまな質問を総合して総連中央宣伝部から回答したものである。」と説明されています。

3、問答集の始めに「わが国は……人民が十分に食し、十分に装うことができ、良い住宅に住むことのできる社会主義の楽園として発展するにいたった。」と述べています。これに続いて、分野別に回答している内容の要点を以下にまとめてみました。少し長くなりますが、これを読んでいただくと、彼らが北朝鮮の生活をどのように描いて説明したかがよく分かります。(以下の下線は引用者。)

### [食糧問題]

問い 今私たちが帰っていても、食料は不足しないか。

答え 在日60万同胞が全員帰国したとしても食料は充分に保証し、余すことが出来るのです。そして豊かなものは主食の量だけではありません。副食物でも味の良い、栄養のあるものをいくら食べても余すようになるのです。

### [住宅問題]

問い 戦争で多数の住宅が破壊されたというが、私たちが行って住む家はあるだろうか？

答え 現在わが国の平壤市建設者たちは一六分間にアパート一世帯を建てる速度で高層アパートを建設しています。農村では過去のような家はなくなり、全部が近代的な文化住宅になりつつあります。わが国は自国の大きな工場で鉄筋、セメントその他を莫大な量を生産しているので、このような速い速度で多くの住宅を建設することができるのです。

高層アパートは家族四、五名であれば部屋二つに台所、そして風呂、水洗便所があり、たんすや食器棚、寝台なども備え付けてあります。帰国する同胞たちは、国内同胞たちと同様に、このような高層住宅または農村の文化住宅を保証されるのです。

#### [衣料の問題]

問い 衣服などはどうか？着たい服を存分に着られるのか？

答え わが国では今年(1958年)に各種織物を1億2000万メートルも生産出来るようになった。これは日帝時代に比べ90倍も多くの織物を生産することになったのです。そして第一次5カ年計画期間内に1年に人口一人当たり20-25メートルの織物を生産するようになるでしょう。3メートルで服を1着作るなら25メートルでは8着以上作ることができます。毎年このように新しい服を十分に作ることができます。

#### [帰国後の生活問題]

問い 衣食住が豊富だといっても帰国同胞だからといっていつまでも無料で与えられることはないだろうから帰国後の生活はどのようになるのか？

答え 金日成元帥は共和国創建十周年記念慶祝大会報告で『共和国政府は在日同胞が祖国に帰り、新しい生活ができるよう全ての条件を保障するであります。』とおっしゃった。これはどんなにか恩恵深く、ありがたいお言葉ではありませんか。

帰国する同胞は共和国政府からこのように暖かい新生活の全ての条件を保障されるのです。共和国政府は衣、食、住問題を十分に保障することが出来るしっかりとした物質的土台を持っています。ですから帰国する同胞は名実ともに共和国政府から幸福な新生活の条件を十分に保障されることのできるのです。

既に日赤前に座り込み闘争までして帰国した同胞たちが、共和国政府から立派な住宅と衣服、履物、日用品その他の供給と各一人当たり2万ウォン(円)の生活準備金まで受けて、共和国各地を見物し、休息し、自己の希望に従って職場でやりがいのある生活を送っていることは、彼らから送られてきた手紙で、日本の同胞たちもよく知っていることです。

#### [居住と職業の自由の問題]

問い 帰国して自分がしたい仕事をし、住みたい場所で暮らすことが出来るか、いやな仕事を強制でさせることはないのか？

答え 楽しく、自由で幸福な新生活を送るということは、自分が暮らしたいところへ行って住み、技能に応じてしたい仕事をすることが、もちろんできるということです。金一副首相の談話の中にも次のように語られています。

「祖国に戻ってくる在日同胞たちは、住宅、食料、衣料および生活に必要な全ての物質的條件を十分に保証されるであろうし、誰でも自己の技能と希望に従い、職業を持つことができるであろう。」このように帰国する同胞たちは工業や農業や科学、文化、芸術部門、どこでも自己の技能と希望により職業を持つことができます。そのように共和国政府が保障しているのです。これは人民自身が国の主人であり、人民自身が自己の運命と幸福を開拓してゆく政治社会制度の優越性にもとづくのです。それゆえ民団悪質分子たちが言っている強制労働云々は事実においても理論においても全く問題にもならないことは明白です。

#### [賃金と生活費問題]

問い 仕事をすれば賃金はどのくらい貰えるのか？6人家族の中で一人働けば生活することが出来るのか？

答え 共和国では失業者というのは一人もいません。そして共和国では性別、年齢別、民族別などに関係なく、同じ質と量の

労働に対しては同一の報酬を受けることができます。また優れた仕事やより高い技術や能力を要求される仕事、より骨の折れる仕事に対しては、より多くの報酬を支払うのが原則です。最近、共和国を訪問して戻った日本の参議院議員相沢重明氏、横須賀市議本多七郎氏などの報告によれば、祖国の勤労者の賃金は次のとおり。黄海製鉄所では最低が2300ウォン、採鉱技術者は1万3000ウォン、平均が3500ウォンです(共和国の貨幣は日本のお金の3倍です)。教員では人民学校3000ウォン、初級中学3800ウォン、高級中学4000ウォンです。

そして共和国には女性を含むどんな勤労者の最低賃金も2200ウォン以下はないと訪朝人士たちは語っています。

また以上の賃金は8時間労働に限ったものであり、基準を超過する勤労者には上記の賃金に加えて、さらに数千ウォンを受け取っています。例を挙げると宮森氏の報告によれば4000ウォンの賃金を貰っている勤労者が超過達成によって、さらに4000ウォンの追加給金を受け取り、賃金が倍になる例が数多くあるという。

ところで生活費を見るとコメは勤労者には1日に700~850グラム、子ども、児童にも400グラムずつ配給され、一月に25日分を白米で、残りを雑穀で与えられます。(現在日本の米配給量は一人当たり365グラムであり、これもひと月に14日分しかくれません。)

ところで配給のコメの値段は1キロにつき5ウォン、ひと月70ウォンである。ですから6人家族でコメを6人分食べるとしても、その値段は420ウォンにしかならないのです。

家賃は2部屋のアパートが85ウォン、平均50~70ウォンであり、設備がさらに良い住宅も200ウォン程度です。そして勤労者には賃金以外に被服、履物、その他日用品の現物支給があります。また子女の教育は国家が保障するので、お金が掛かることはありません。このように見てくると6人家族のうち一人が働き、最低賃金の2200ウォンを受け取ったとしても、十分に生活できるだけでなく、その上さらに努力すればさらに一層豊かな生活を行うことができるのは明白です。しかも共和国政府は、1959年1月1日から、再び全勤労者の賃金を40%引き上げることを決定しています。

4、北朝鮮の生活の実情とかけ離れたこんな誇大宣伝をしていたわけですが、脱北者にインタビューして帰国前に聞かされた説明を聞くと、実際の帰国の勧誘過程では、この文書にある説明がさらに誇張され、もっと極端な虚偽の説明が行われていました。日本人妻が聞かされた「3年たったら里帰りができる」という説明も虚偽でした。

言葉だけで説得するのは難しいものですから、それをさらに映像で補強しました。北朝鮮の住宅が映る、鉄筋のきれいな建物、家の中には家具がみんな揃っている、そして米櫃を開けると米がいっぱい入っている、こんなふうに必要なものがすべて用意された家があなたたちを待っていますと、こういう説明を繰り返したのです。

5、しかし、ソ連大使などの報告によると、北朝鮮では衣食住も不十分で「地上の楽園」とは程遠い実情にあることを北朝鮮の高官らも認めていました。

「北朝鮮帰還協定締結の前月である59年7月、朝鮮労働党中央委員会の会議に招かれたソ連大使は、党幹部が次のように発言するのを聞いた。

『(国民の)住宅と衣料が十分でない。国民は、肉や油を欲しているが、これらの生産は少ない』

同月、北朝鮮の南日外相も、ソ連の高官ミコヤン氏に対し、こう発言していた。

『満足できないような低い質の(工業)製品が生産されている。(略)(61年から始まる)第二次5カ年計画で(略)国民の生活水準の向上という課題が大きな焦点になる』』というのです。(甲30号証、菊池嘉晃「ソ連秘密文書が裏付ける「北」コメも足りない「楽園」の虚妄」『読売ウイークリー』2006年8月13日、p.21。)

1960年6月に北朝鮮側がソ連大使館に渡した文書にも、次のような実情が書かれていました。「『住民生活は、目下低い水準にある。(略)(朝鮮)戦争によって、わが人民の生活にもたらされた損害は、いまだ完全にぬぐい去られてはいない』

また、食糧配給の質の低さについて、ソ連大使は同月、北朝鮮高官から具体的な説明を受けていた。

『食糧難は、まだしばらく解決されそうにない。(略)コメの住民への標準的配給は、平壤でのみ、しかも基準量の50%という規模でしか行われておらず、残りの部分は、トウモロコシと小麦粉があてがわれている。国内のその他の都市では、住民への配給は、トウモロコシと小麦粉のみとなっている。』(甲30号証、菊池嘉晃「ソ連秘密文書が裏付ける「北」コメも足りない「楽園」の虚妄」『読売ウイークリー』2006年8月13日、p.22。)

問答集の答えとは大きく異なる実情にあることは、北朝鮮政府自身が十分に認識していたのです。

## 第九、密航して真実の北朝鮮を知っていた朝鮮総連幹部

1、朝鮮総連の幹部は北朝鮮の実際の姿を知らずに、「地上の楽園」と信じて説明していたのかというと、決してそうではなかったのです。

朝鮮総連の幹部はさまざまな方法で北朝鮮労働党や北朝鮮政府と直接連絡をとり、その指示を得て方針を決定し、運動に取り組んでいました。北朝鮮との連絡には密航による行き来も度々行われていましたから、その過程で朝鮮総連幹部は北朝鮮社会の現状を直接見聞きし、その経済状況と生活の実情を正確に知ることができたのです。

2、朝鮮総連幹部が度々北朝鮮に密航していたことは、これまでの研究や調査で明らかになっています。そのいくつかを示すと、以下の通りです。

「韓徳銖は民戦の幹部でありながらも内密に「工作船」で金日成に連絡員を送り、彼自身も「工作船」で北朝鮮に渡っていたといわれる。このことは現在では公然の秘密である。北朝鮮の工作船はこの頃も日本との間を行き来していたのだ。」(朴斗鎮『朝鮮総連』中央公論新社、2008年、p.36。)

「朝鮮戦争中の52年12月、コンジリにあった最高司令部で金日成は韓徳銖が送った連絡員と会見し、朝鮮総連結成の指示を与えたという。」(朴斗鎮『朝鮮総連』中央公論新社、2008年、p.222の呉圭祥『朝鮮総連50年』に基づく記述。)

「民族派は北朝鮮の支援を仰ぐため、幹部たちが漁船で密航して北朝鮮の要人たちと協議を続けた。その密航幹部の中には韓徳銖(朝鮮総連の創設以来2001年に死去するまで議長を務めていた 山田文明注)もいたと、引退した総連老幹部は語っている。」(金賛汀『朝鮮総連』新潮社、2004年、p.49。)

「北朝鮮指導部は結成されたばかりの朝鮮総連内部の混乱を恐れ、前衛組織設立を見合わせるように指示してきた。それでも民対派は納得せず、朝鮮労働党との協議のため、民対派の大幹部二人を密航させた。だが、北朝鮮当局は密航してきた二人を軟禁し結論を先送りしてしまった。」(金賛汀 前掲書、p.59。)

「1955年8月末、解放十周年の祝賀で総連代表団が平壤を訪れた。この代表団のために自ら主催したレセプションで金日成主席が、在日朝鮮人の生活改善に力を貸す、とくに民族教育を支援する、と約束した。」(テッサ・モーリス-スズキ 前掲書、p.131。)

「総連結成直後の(1955年 山田文明注)8月、朝鮮総連は『祖国解放10周年祝賀在日同胞代表団』を送り出した。この代表団の目的は、結成された総連の様々な問題を北朝鮮に報告し、その解決策の指示を仰ぐことにあった。」(金賛汀 前掲書、p.69。)

「朝鮮総連は1955年9月、結成後初めて派遣した祖国訪問団の林光徹団長が金日成と面会して教示を受けた。」(田駿『朝鮮総連研究』第2巻、高麗大学校出版部、1972年、p.290。)(菊池嘉晃「北朝鮮帰還事業「前史」の再検討 - 在日コリアンの帰国運動と北朝鮮の戦略を中心に -」『現代韓国朝鮮研究』第8号、2008年11月、p.77。)

「北朝鮮社会の現実を知っていたのは何度か密航し、北朝鮮当局と秘密裏に協議したいごく少数の最高幹部だけである

う。その中には朝鮮総連結成の謀議のために北朝鮮に密航した韓徳銖議長も含まれている。彼らの罪は重いのだ。」(金賛汀『朝鮮総連』新潮社、2004年、p.79。)

朝鮮総連自身も密航の事実をホームページで公表していません。

「金日成將軍は1948年12月23日、小型船に乗って朝鮮東海を渡って祖国を訪問した共和国創建在日朝鮮人慶祝団と会見し、在日朝鮮同胞が進むべき道を明らかにした。」(朝鮮総連のホームページ

<http://www.chongryon.com/j/cr/index.html>)

3、このように、朝鮮総連の幹部が度々北朝鮮に密航していたという状況を踏まえて判断すると、朝鮮総連の下部の活動家たちは北朝鮮への帰国がより良い生活につながると信じていたとしても、「幹部クラスになると情報はもっとずっと手に入れやすく、プロパガンダと現実とのあいだのギャップを認識していたとすべき根拠はもっと多くなる」とテッサ・モーリス-スズキさんが判断するのは当然のことです。(テッサ・モーリス-スズキ 前掲書、p.199。)

## 第十、関貴星さんの北朝鮮情報に耳を貸さなかった朝鮮総連幹部

1、1960年8月から9月にかけて、関貴星さん(当時朝鮮総連中央財政委員、日朝協会岡山県副支部長、1951年養子縁組により日本国籍を取得。)が北朝鮮の解放15周年記念慶祝大会に日本の訪朝団の一員として参加し、北の社会と人々の状況を鋭い感性で観察してきました。日本に戻った関さんは、北朝鮮で体験したこと、観察したことを朝鮮総連幹部に伝えようとしています。帰国事業をこのままのやり方で進めれば、帰国者に大変な被害をもたらすことになる、それを回避するためには、帰国者に北朝鮮の正確な実情を伝え、祖国の建設がなかなか厳しい状況にあること、それに耐え抜いて頑張るといふ、そういう自覚を持たせて、準備をさせて北に帰さないといけなく、従来どおりの仕方、北朝鮮を「地上の楽園」だといって帰国させていけば、恐るべき人道上の誤りを起こすことになるかと訴えるのです。しかし、朝鮮総連本部の人たちにはそれに耳を傾ける姿勢はまったくなく、それどころか関貴星さんをスパイだと誹謗して排除していくのです。

2、関さんは岡山市で次のようなことを体験しました。1週間後に帰国する人々の学習会に出席した関さんは、「地上の楽園へ帰るなどという甘い考えを棄て、自分らの力で泥まみれになって祖国を建設するのだ、という覚悟をもたなければ帰国する意味がないぞ」と教えようとしてきました。すると同席していた朝鮮総連の幹部が「帰国する人にそんなことを喋っちゃこまるじゃないか」というのです。関さんが反論すると、その幹部は「一般帰国者は無知なんだ。それでいいんだ。なまじ本当のことを知らせると、帰国者がなくなってしまうからな」と平然たるものであったというのです。(甲19号証、関貴星『楽園の夢破れて』全貌社、1962年、復刻版は亜紀書房、1997年、p.83。)

## 第十一、清津港に着いた帰国者の驚きと被害を示す出迎えた人の証言

1、帰国事業が始まったときの北朝鮮副首相金一の補佐官であり、迎接員として帰国者の受入れに携わった後、1963年に韓国に亡命した呉基完さんは、帰国船に乗って日本から帰国してくる人々について、次のように語っています。

北朝鮮の「一般の人たちは、その前に私たちが宣伝したため、なにか、みずばらしい人たちが、骨と皮ばかりの人たちが、哀れな姿で帰ってくるんじゃないか、そんな人たちは、感激で涙を流すだろう、と考えていたようでした。……

ところが、……船に乗っている人たちは、私たちが想像していたようなみずばらしい人たちがなくて、本当に想像もつかない人たち、天から降りてきたような人たちでした。服装なんか、想像もつかないほど立派でした。私たちが本当にびっくり仰天してしまいました。……

同時に、船の上のほうでも、金日成万歳を唱えながら埠頭の

人たちを見て、びっくり仰天したようですね。「地上の樂園」と聞かされてやってきた北朝鮮の人たちの冬の服装が、あまりにもみずぼらしかった。これはどこか違ったところに来たかというような風情で、ポヤーンとしてこちらを見ているんです。

双方がポヤーンとした瞬間がすぎて、船が接岸しました。タラップを下りてくる若い人たちが、大きな声で「わぁ、これ参ったな」「だまされているんじゃないか」「うそだなあ、これは」とか言っているのが聞こえました。

……最初の1年ぐらいの間に5万人という人が来ました。この状況を受けて金日成は、初めは帰国同胞の思想改造を命令したんです。……ところが駄目なんです。彼らはなかなか北朝鮮の生活に馴染まなかったのです。

……また、時を同じくして「スパイ事件」が頻発したんです。「帰国同胞の中には、南の特務がひそかに含まれている」。あるいは、「日本で特別の訓練を受けた国際スパイが、帰国同胞を装っている」。ほとんどがでっちあげなんですけど、毎日のように「スパイ事件」が摘発されたのです。そうすると私たちとしては、つい「あの野郎もスパイじゃないか」というような考えを、帰国同胞に対して持ってしまう。……

多くの帰国同胞たちが不満不平をこぼしたりする、そうしたらそのまま逮捕されていくこととなります。どれだけ不満分子が多かったかという、平壤のサンソックという郊外、そこに特別の刑務所を新しくつくったことからわかります。これは帰国同胞の中で、不平不満を言ったりして反動的な罪を犯した人たちだけを収容する特別の収容所です。」（「対談 元担当者が初めて語る「北」から見た帰国運動」『月刊Asahi、1,992年3月、p.144-147。』

- 2、清津に帰国者を迎え入れた別の人からも、同様の証言がありました。1989年、金賛汀さんがソ連作家同盟の招待を受けて中央アジアのカザフスタンを訪問した旅の途上、「カザフスタンの都市、アルマトイで、思いがけない人々と出会った」というのです。それは北朝鮮からの亡命者たちで、その「亡命者の一人とアルマトイで出会い、1959年の在日朝鮮人の帰還事業での、北朝鮮清津港入港の時の状況を」教えられたのです。
- 3、「清津市の人民委員会の中堅幹部だった彼 李鎮植は日本で迫害と貧困に苦しんだ在日朝鮮人が祖国に帰還してくる、暖かく出迎えようという当局の指示を信じ、埠頭に帰還歓迎者の群れに加わった。

多くの北朝鮮市民が、歓迎のため詰めかけていた。李は極寒の北朝鮮に帰還してくる在日朝鮮人が、貧しさのために防寒服ももっていないのではないかと考え、軍隊除隊時に持ち帰った、古びた綿入りの軍用オーバーを帰還してくる貧しい在日の人々にプレゼントしようと思い、オーバーを小脇に抱えて待機していた。

やがて在日帰還者たちが下船してきた時、彼らを見て李鎮植は驚いた。彼らは皆貧しいどころか、とても豊かに見えた。北朝鮮ではよほど豊かでなければ身に付けていない腕時計を総ての人が腕にはめ、ウールの新品のような暖かそうな防寒服やオーバーに身を包んでいるのを目の当たりにして、伝えられていた貧しく哀れな人たちという状況とあまりにも違う光景に、ただ驚いた。自分の持参した古びた軍用オーバーなど恥ずかしくて、とても差し出せず、そのまま持ち帰った」というのです。（金賛汀『將軍様の鍊金術』新潮社、2009年、p.65-68。）

- 4、このように、一目瞭然の日朝間の経済格差、国民生活の水準の格差があるにも関わらず、北朝鮮政府と朝鮮総連は北朝鮮を「地上の樂園」と宣伝し、判断を誤らせて北朝鮮に帰国させたのです。

## 第十二、「地上の樂園」北朝鮮に戻った帰国者の生活

- 1、これまで私がインタビューして聞き取った脱北者の話の中から、特に北朝鮮に着いた後の日常生活の実情について説明します。その中に、北朝鮮政府と朝鮮総連が行った帰国後の生活の説明が、事実をまったく伝えていなかったことが示されています。
- 2、北朝鮮を脱出して日本に戻ってきた日本人妻が共通して証言

していることがあります。朝鮮総連は日本人妻に「北朝鮮に行っても、3年たてば里帰りができる」と繰り返し説明し、説得していたのです。しかし、実際にはそんな約束が守られたことはなく、1960年代半ばに、日本人妻たちが約束通り日本へ里帰りさせてくれと北朝鮮政府に要請したところ、その人たちは捕らえられていきました。

- 3、脱北者たちが異口同音に語る北朝鮮の生活は、一昔さかのぼった古い時代の生活になってしまったということです。北朝鮮では都市の一部を除いて水道はなく、一日何度も湧き水が川の水を汲みに行っては家まで運び、水かめに入れておいて使います。バケツもまともに無いから、日本から持ち帰った一斗缶、そんなものをバケツ代わりにしました。都市部のアパートに入居して、そこに水道があったとしても、3階・4階だと水圧が弱くて水がでないので、1階まで降りてバケツに水を入れ、階段を運び上げなければなりません。水の確保だけでも、毎日重労働だったのです。
- 4、燃料はと言うと、この例は恵まれた方だと思うのですが、石炭の粉が届く、それに粘土をまぜて水で練って練炭や豆炭を自分で作ります。粘土を混ぜるのは火力を調整するためと、燃えた滓が元の形で残って後始末しやすいからです。お金のある人は、粘土を混ぜると火力が弱くなるので、石炭の粉をそのまま練って作ります。その方が火力が強いのです。
- 5、家の中には風呂もトイレもありません。トイレは共同トイレで、お風呂はありませんから、苦勞して汲んできた貴重な水を沸かして、身体を拭く程度です。
- 6、北朝鮮北部の咸鏡北道の山奥に配属された3人家族の日本人妻の住宅は、6畳くらいの2間と台所の土間、その土間にかまど、流し、それに水かめが2・3ありました。トイレもお風呂もありません。水かめに水を汲んで来て貯めておいて使う。流しで炊事をして水を使いますが、排水の用意がありません。ですから、排水も水かめにためて捨てに行くのです。
- 7、暖房はオンドルで、土を固めた床下を通る煙で床暖房になります。石炭を焚きますから、少しでも土の床にひび割れができると、そこから石炭ガスが出てきて、寝ているうちに中毒で死んでしまう。そういう危険もあったのです。こういう環境で暮らし始めたということです。
- 8、そして山の中だったこともあり、魚なんかはありませんでした。わずかな山菜の干物がある程度です。当初は、配給される食糧はほとんど麦粉で、米は10%しかありません。麦粉と言っても日本の小麦粉を想像しないでください。日本の小麦粉なら白くて、水を入れてこねれば粘りが出ますし、おいしい料理が作れます。しかし、配給された麦粉は真っ黒なもので、水でこねても何の粘りも出ない。ドロドロになるだけでした。何とかして炊いたりしても、とても硬くて食べられない。そういうものだったのです。
- 9、そして米も長くて臭い米でしたから、夫は食べられず、見る見る痩せ細っていきました。それで、日本から持って来たものと物々交換をして米を手に入れるしかありませんでした。当時、自転車一台売れば、ほぼ1年分の米を手に入れることができました。ある一家は2台持って帰りましたが、2台ですから2年分の米が確保できるにすぎません。つまり1・2年で日本から持って行ったいろんな品物は全部食糧に換わるのです。その後はもうどうしようもないのです。そういう生活環境に、突然放り込まれたのです。
- 10、しばらくすると、配給される食糧はとうもろこし90%と米10%に変わりました。副食は自分で山菜を採りに行くなど、自給自足に近い生活です。味噌もとうもろこしで作った味噌で、しばらく置いておくと酸っぱくなって臭くなる。醤油もとうもろこしで作ったもので、日本の味とは全然違うのです。塩は貨車にそのままバラ積みして運んでくるから、石炭やら何やら、前に運んだ物と一緒に混ざっていて、塩だのに黒かったそうで、混ざっている石などを取り除いて使うのです。
- 11、北朝鮮へ行って突然こんな生活になったわけです。そのショックは大変なものでした。しかし、そんな物でもあるうちはまだ良かったのです。80年代になり、特に90年代になると、食糧の配給制が崩れた上に、一般の人々は食糧を手に入れること自体できなくなるという、とんでもない状況になって、大勢の餓死者が発生したことは、ご存知の通りです。

12、北朝鮮に着いてから配属された場所へ移動するときにも、大変な経験をしました。列車に座って揺られて行くうちに、痒くてしょうがなくなる。原因は南京虫でした。途中で利用した宿でも、電気を消して寝ようとすると体中が猛烈に痒くなる。電気を点けると南京虫がうじゃうじゃいる。その南京虫を退治する殺虫剤などは何も無いのです。

多くの帰国者が、簡単な病気でるくりに治療を受けられず、治るものも治らずに死亡していききました。

13、帰国事業によるこういう被害が、帰国したときに起こったというだけではありません。その被害が、今もなお続いているのです。50年が経過しようとする現在まで、さらに深刻な食糧難に陥りながら続いているのです。食糧事情はまだ70年代の方が良かった。それ以後は、どんどん悪化していき、1990年代の激しい飢饉となったのです。帰国者の悲劇は、その子孫にまで受け継がれているのです。

### 第十三、帰国者の財産を手に入れた北朝鮮政府と朝鮮総連

1、金賛汀さんによると、「北朝鮮政府は在日朝鮮人の帰還事業が開始された後、改めて自分たちが宝の山を掘り当てたことに気付いた。朝鮮総連を通じて、在日支配を強め、在日の人々の資産を「愛国事業」へ献金という口実で吸い上げるようになっていった。北朝鮮も宝の山を掘り当てたが、朝鮮総連の獲得した利益と資産も多かった。帰還者に対して朝鮮総連が、北朝鮮は社会主義国で、住宅も就職も教育も国家が責任を持って保障してくれる『地上の楽園』だと宣伝していたため、家屋敷を朝鮮総連に寄贈して、帰還する人も少なくなかったからだ」と述べています。

2、さらに、金賛汀さん自身の見聞として、「私の知人の父親に、パチンコ店を2軒経営していた人がいた。彼は帰還するに当たり持ち帰る必要はない、とパチンコ店を総連本部に寄贈して帰国して行った。北朝鮮に帰還して初めて北朝鮮の生活を知り、呆然となったが、それこそ後の祭りであった。……北朝鮮の現状を自ら確かめ、帰還した在日の人々の生活を肌で知ることができなかつたせいで、北朝鮮政府の宣伝や、朝鮮総連の宣伝に幻惑されていたからである。」と述べています。（金賛汀『将軍様の錬金術』新潮社、2009年、p.71-72。）

3、1959年4月6日付けの朝鮮総連中央帰国対策委員会の『帰国者に対する実務趨進要綱』には、「帰国者の一切の財産を祖国に運ぶために」と題して、次のような指示を傘下組織や帰国者らに与えています。

「携帯物品に対して帰国者は祖国の富強な建設に供給することが自己の幸福を享くのと関連して（略）自己の所有物をすべて祖国へ移動することと同時に、余裕がある同胞は、祖国建設に必要な物品を少しでも購入して持って行くようにする必要がある」（日本外務省仮訳）

そして、「物品の購入は総連機関の指導に基づくように指示。在日同胞の祖国愛に訴える形で、経済建設に必要な物品を北朝鮮に搬入しようとしたのである。」（甲6号証の2、菊池嘉晃「旧ソ連文書から読み解く、「北朝鮮帰還事業の爪痕（後編）旧ソ連・東欧文書で明かされる真相 帰国運動の"変質"と帰国者」『中央公論』2006年12月、p.256。」）

4、テッサ・モーリス-スズキさんも、「日本に残しておく資産を総連に預けて北朝鮮に渡った人が多かったために、帰国事業は総連の金庫に大きな富を送りこんだ。」と述べています。（テッサ・モーリス-スズキ 前掲書、p.200。）

5、後に発生するもっとひどい事例では、帰国者の日本の家族・親族が資産家であったとすると、その帰国者をいるんな理由をつけて収容所へ送る、そしてその家族・親族にその帰国者を収容所から出すためにはある金額が必要だと持ちかけるのです。それも数千円から億単位の法外な額です。こういう現実が数多くあるのです。

また、帰国者の生活や地位を確保するために、日本の家族は50年にわたって品物や現金を北朝鮮に送り続けてきているのです。北朝鮮で待つ本人の手に届かないことも多いにもかかわらず。

6、「この帰国事業で朝鮮総連は経済的に大きな利益を得」て、

この資金が「その後長く総連の活動の重要な経営基盤になりました。」「朝鮮総連が帰国事業以来、様々な手段で蓄積してきた資産の総額は数千億円規模にのぼる」といわれています。（金昌烈『<増補版>朝鮮総連の大罪』宝島社、2006年、318 - 320ページ。）

### 第十四、帰国事業を推進した北朝鮮政府の目的

1、北朝鮮政府は帰国事業を進めるにあたって、経済的にも政治的にも明確な実利的な判断をしていました。呉基完さんの見解やこれまでの調査・研究をもとに、北朝鮮政府が帰国事業を推進した目的は、次のようにまとめることができます。

2、第1に、経済の再建に不可欠でありながら、著しく不足していた技術者と労働力を確保することです。1950年から1953年まで続いた朝鮮戦争で多くの労働力を失い、国土を荒廃させましたが、そういう事態からまだ充分立ち直れずにいるところでした。経済建設を急がねばならない、再建を急がねばならないその時に優秀な技術者や労働力がいない、これをどうするか、その対策として海外にいる朝鮮人の帰国を考えたのです。ですからこの時期に帰国事業が行われたのは日本だけではありません。ロシアにいる朝鮮人についても、中国にいる朝鮮人についても、北朝鮮への帰国を進めたのです。

3、第2に、経済再建に関係したことです。産業を移植する、あるいは工場を移植するという事です。たんに技術者や労働力を北朝鮮に移すだけではなくて、職業集団をまとめて北朝鮮に移すのです。できれば工場の経営者ごと、その工場にあった機械設備も一緒に北朝鮮に移すのです。

北朝鮮当局は、個々の帰還者が計画的に機械・設備を持ち込むように、朝鮮総連に指示しました。朝鮮総連はその指示にしたがって、さまざまな技術者集団を組織し、北朝鮮に送り出していったのです。日本の各地に職種技能家集団を組織し、北朝鮮での厚遇を約束して、帰還を勧めました。「そうして大阪のビニール加工技術者集団、ミシン製造技術者集団、製靴技術者集団、メリヤス製造技術者集団、京都の西陣織技術者集団、東京の自動車整備技術者集団とあらゆる種類の技術者集団を手当たり次第に組織し、北朝鮮に送り出した」のです。（金賛汀『将軍様の錬金術』新潮社、2009年、p.70-71。）

送り出した一例として、一つの新聞記事を紹介しておきます。1964年5月19日の『朝鮮新報』に掲載されている広告です。「帰国挨拶」として第117次船で「祖国の懐に帰国すること、朝鮮総連などへの感謝と日本にいる同胞への別れを記した短い挨拶文です。この広告を出したのは「洋傘ミシン加工集団」となっていて、大阪生野区の4人の名前とその家族23名と書かれています。

呉基完さんは、帰国事業で日本から持ち込まれた工場、機械設備、これが北の経済復興に大きく貢献したし、その時の機械などが更新できずにそのまま現在まで残っているような状態だといっていました。

4、第3に、資本主義の国から社会主義朝鮮への民族移動ということで、金日成の政治的優位性を世界にアピールし、宣伝効果をあげるということです。これは特に韓国を意識していたと思います。

5、第4に、対南（韓国）工作の人脈づくり、人質づくりを進めるためです。このことが当初からどの程度意識されていたのか明確に示すものではありませんが、対南工作を重視する政府ですから、当初から意図していたと思います。そして、後にこれが活用されて、重大な事態を引き起こしてきたのです。そして、今現在も活用されているのです。

一例を挙げれば、北朝鮮の工作員辛光洙は帰国者Aさんの写真をもって日本に潜入し、Aさんの妹さんに兄の写真を見せて自分に協力するよう働きかけました。この妹さんの家の2階に住みこんで工作活動をつづけ、1980年6月に原教畝さんを宮崎に連れ出して北朝鮮へ拉致し、81年9月には原さんの住民票を大阪から東京に移し、11月には原さん名義の旅券を取得し、その旅券を使って韓国に入りましたが、1985年6月に韓国で逮捕されました。そして後にこの辛光洙が横田めぐみさんの拉致にも深く関係していたことが分るのです。また、辛光洙との関係



で、Aさんはスパイと見なされ、北朝鮮政府によって銃殺されてしまうのです。

要するに、日本を通して、日本を媒介に南へ職員を送る、そのための手段として帰国船という交通手段と帰国者家族という無限に広がる可能性をもった人脈を使うということです。もちろん、当然日本に対する工作の手段としても使われているわけです。

6、第5に、これは当初から意識されていたのかどうか分かりませんが、帰国者やその日本の家族・親族の生活に大きな影響をあたえた問題があります。在日朝鮮人が持っていた財産を取得することです。

どのようにしてこれが行われたかという、帰国する時に個人が現金で持っていけるのは一人当たり4万5000円までで、それを英ポンドに換金して持ち出すことは認められていました。荷物は一人当たり60kgまでに制限されていました。会社を営んでいた人や不動産などを所有していた人は、その資産を処分して換金できたとしても、北朝鮮へ持ち帰ることはできなかったのです。そのような場合、処分できなかった財産とともに朝鮮総連に預けていったのです。そして預かり証をもらって北朝鮮に帰っていきました。

北朝鮮で暮らし始めて困難な生活に直面してから、預かり証を示して、「預けた財産を自分に帰してくれ」と言い出す、そんなときに北朝鮮政府がどう対応したかという、「何を言っているんだ。北朝鮮ではこれだけ準備して、あなたたちに対応しているではないか、これ以上何を言うか。」ということで、誰にも返さなかったのです。こうして朝鮮総連の手に入った巨額の資産の一部は北朝鮮政府に送られ、一部は朝鮮総連の財産となったのです（呉基完さんの証言）。

以 上